

樹木の病害虫に関する調査研究（2）

予算区分：県単	研究期間：令和元～5年度	担当：森林科学係 川島 祐介・北野 皓大
---------	--------------	----------------------

その他病害虫

I はじめに

樹木の病害虫発生は、気象などの環境要因の変化に伴い、突発的に発生するものが多い。また、発生の初期においては、気づかないことが多く、その被害が顕著になってから報告される。近年は平均気温の上昇など気候変動も叫ばれるなか、外来侵入種も含めて樹木の病虫害発生も多種多様化している。

そこで、今年度当场が把握しているものの中から、特徴的な事例について報告する。

II 方法

1 スギ成木の枝葉褐変症状

高崎市、中之条町、昭和村のスギ林において、5月下旬から梢端部の枝葉を中心に褐変し、一部では枯損がみられた。そこで、現地に赴き枝葉の状況を調べるとともに、褐変した枝葉を持ち帰り病害虫の有無を顕微鏡等で確認した。

2 コナラの枝枯れ症状

みなかみ町入須川の「中野の森」で80cmより上部の枝幹が枯れた状態のコナラがみられた。植栽年は平成26～30年である。そこで、現地調査を実施した。

3 ツツジ類の樹勢衰退

赤城山白樺牧場（前橋市）のレンゲツツジの樹勢が衰退しているため、現地調査を実施した。また、つつじが岡公園（館林市）、林業試験場（榛東村）のツツジ類も併せて調査を実施した。

4 広葉樹の赤衣病

みなかみ町の広葉樹林において、ナラ枯れを調査したところ、赤衣病に感染した広葉樹（ウルシ）を確認したため、その病徴、標徴について調査を実施した。

III 結果及び考察

1 スギ成木の枝葉褐変症状

高崎市の現地調査、標本調査ならびに中之条町の標本調査を実施したところ、虫害ならびに病害は認められなかった。令和4年の1月から2月にかけては、山間部では例年に比べて、積雪量が多く、また低温、強風の観測事例（気象庁ホームページ）いくつかみられた。これらのことから、本件は冬期における寒害もしくは寒風害によるものと推察された。なお、枝葉が褐変したスギ成木は、そのほとんどが枯死せずに、樹勢が回復した（図-1）。

2 コナラの枝枯れ症状

枯れているコナラについて詳細に観察したところ、枯損した枝幹等に虫による穿入痕が見られないことなどから、虫害による枯死ではないと考えられた。また、病害による病徴、標徴も認められなかった。枯損の原因として、上部は枯れているが、下部は健全に生きており、また植栽地は以前、放牧地で風当たりも強いことなどから、寒風害によるものと考えられた（図-2）。

3 ツツジ類の樹勢衰退

白樺牧場の現地を調査したところ、レンゲツツジ群落の樹勢が衰退していることを確認した。この衰退現象は、数年前に牛の放牧を中止したものと関連性があると考えられている。放牧には牛の食餌による灌木の侵入防止、除草、排泄物による施肥効果などがあることがわかっており、放牧を中止したことでバランスが崩れ、レンゲツツジが衰退していったと考えられた。

なお、衰退しているツツジの枝にはウメノキゴケの仲間と思われる地衣類の着生が目立っており、同様の現象はつつじが岡公園や当場のツツジ類にも認められた。ウメノキゴケの仲間は成長の遅い樹木の枝幹に着生するとされ、生育を阻害することはないといわれているが、その詳細は不明な点が多いのが現状である（図-3）。

4 広葉樹の赤衣病

本病 (*Erythricium salmonicolor*) は、果樹（リンゴ等）の病害として以前から知られている。多犯性の病害であり、本県においては1988年に栽培されたイチョウやヒメリンゴ、オウシュウトネリコなどに発生報告があるが、森林地帯で確認されたのは初めてと思われる（図-4）。



図-1 スギ成木の枝葉褐変症状



図-3 レンゲツツジに付着したウメノキゴケの仲間



図-2 コナラの枝枯れ症状



図-4 赤衣病(6月；淡紅色の菌糸膜)

引用文献

- 1) 後藤 彩・井田秀行：国指定天然記念物「湯の丸レンゲツツジ群落」のモニタリングの概要、信州大学志賀自然教育研究施設研究業績 47. 1-4、2010
- 2) 佐藤邦彦：ウメノキゴケ属地衣類による樹木の被害、98 回日林論、507-508、1987
- 3) 川島祐介・山口忠義：イチョウの新病害、赤衣病、100 回日論、633-634、1989
- 4) 川島祐介：群馬県で発生した広葉樹の赤衣病について、森林防疫 38、183-185、1989